

豊川^{わたる} 渉 と坂本龍馬

幸福度を
上げる



すでにある
価値に気づき

いろは丸で乗り合わせる

大洲藩の下級武士の家に生まれた豊川渉（弘化4年・1847年～昭和5年・1930年）は、幕末の志士坂本龍馬といろは丸で乗り合わせています。

慶応2・3年頃（1866・1867年頃）、豊川渉は坂本龍馬と二・三回面談があった模様です。豊川は大洲藩がオランダから購入した蒸気船いろは丸の機械油指見習として乗船していましたが、その船中で龍馬は豊川渉の刀に興味を持ち「珍しい拵（こしらえ）である」と手に取ったそうです。

桂浜の龍馬像

豊川渉の侍姿の写真は、慶応3年、長崎の上野彦馬写真館で撮影したものです。坂本龍馬も上野彦馬写真館で撮影したようで、豊川渉の子孫によると、高知桂浜の龍馬像の元になった写真は、豊川渉が持っていた写真を「龍馬会」に寄贈したものだそうです。もしも、豊川渉と坂本龍馬の出会いがなかったら、桂浜の龍馬像は存在しなかったかもしれません。

豊川^{こうざん} 渉 と榎 江山 と伊藤博文

初代内閣総理大臣を務め、明治の元勳とも呼ばれた伊藤博文は明治42年3月14日～28日までの二週間愛媛に逗留しています。道後温泉での湯治や自身の先祖のルーツを訪ねる旅であったといわれています。当初は1週間程度の逗留の予定でした。郡中町長豊川渉等は博文の郡中町訪問を陳情し、愛媛での最後の訪問先に郡中町が選ばれたようです。わずか3時間足らずの郡中滞在でしたが、博文は郡中にいろいろな足跡を残しています。

当日は13時、伊予鉄松山駅着。13時30分、松山駅発。14時、郡中停車場下車。郡中小学校、松前小学校、松本小学校の児童らが歓迎。人力車で彩浜館へ向かう。寒風吹きすさぶ中、彩浜館に隣接する広場で360余名が参加し歓迎会を開催。豊川渉が歓迎の辞を述べる。

博文は彩浜館の2階で、豊川等の求めに応じて、五色濱神社と湊神社の社号を絹の布に書いています。その時の模様を豊川渉は手記「思出之記」に記しています。合祀により新しく建設中の灘町の五色濱神社の社号を博文に書いてもらうことになっていました。湊町にも合祀により新しい神社を建設する予定だった為有志は、わが町にも社号を書いてほしいと豊川に相談。豊川「合詞（祀）の運び

もつかず名称もないではないか」湊町有志「何とでもよろしく」豊川は湊神社とし、これを書いてもらおうと、同行していた安藤愛媛県知事に相談 安藤「それはあまりじゃ、最早よせ」といさめる 有志等は「是非に」根負けした知事は博文に「当町には合詞（祀）神社が 2 ヶ所あります。夫故（それゆえ）に今一つと申すが」博文は「よいから早く」とさっさと書いたそうです。



伊藤博文の書 五色濱神社社号
(伊予稲荷神社保管)



伊藤博文の書を写した湊神社社号額

榎江山は、彩濱館の前庭でお庭焼きを行い、博文は江山焼抹茶茶碗に染筆し、焼き上がりの速さと出来栄えの良さをほめています。



伊藤博文染筆江山焼抹茶茶碗 (伊予市教育委員会所蔵)

博文は彩浜館の1階に展示されていた五色浜の五色の石に目を止め、孫の土産に持ち帰る。16時51分、郡中停車場発、鮎屋旅館へ帰館。町長豊川は、郡中町近代史の中で最も著名な人物伊藤博文の来町を立派に演出したようです。

ともあれ、この日、3月26日は、豊川渉にとっても、また榎江山にとっても一世一代の檜舞台だったと思われます。